127 ART PAPER

2024 AUTUMN

NAGOYA CITY ART MUSEUM NEWS

名古屋市美術館ニュース　アートペーパー

芥川（間所）紗織《古事記より》（部分）、1957年、染料・綿布、名古屋市美術館蔵

特集　芥川（間所）紗織　生誕100年記念プロジェクトにかかわって

TALK BACK「三岸好太郎《海と射光》」　ARTIST「加藤静児」

展覧会現在進行形「空想旅行案内人 ジャン＝ミッシェル・フォロン」　アンケートより「吉本作次 絵画の道行き」

BOOK「新版 名作椅子の由来図典」

REVIEW「北川民次と久保貞次郎 ―真岡市コレクションを中心に―」「舟越桂　森へ行く日」

発行　名古屋市美術館
名古屋市中区栄二丁目17番25号（芸術と科学の杜・白川公園内）
TEL 052-212-0001　FAX 052-212-0005
https://art-museum.city.nagoya.jp/
休館日　毎週月曜日（祝休日の場合は翌平日）、年末年始
開館時間　午前9時30分～午後5時、祝日を除く金曜日は午後8時まで
※入場は閉館の30分前まで

執筆　井口智子（I.）、井手迫蒼（Aoi）、勝田琴絵（KK）、久保田舞美（mm）、近藤将人（コ）、清家三智（3）、竹葉丈（J.T.）、深谷克典（F）、森本陽香（haru）
デザイン　岡田和奈佳
印刷　鬼頭印刷株式会社
発行日　2024年12月1日

Nagoya City Art Museum

特集　芥川（間所）紗織　生誕100年記念プロジェクトにかかわって

画家・芥川（間所）紗織（1924-1966）は2024年、生誕100年を迎えました。それを記念するプロジェクト「Museum to Museums」（芥川（間所）紗織アーカイブ実行委員会主催）は、作品を所蔵する全国の美術館での展示によって、短くも充実した画業の再検証を促すものです。当館も参加を決め、6月末から9月上旬にかけて常設展で特集展示を行いました。筆者は本紙121号（2022年12月発行）の特集記事で取り上げた縁から、展示および解説会、さらには夏休み期間を含むこともあり子ども向けワークショップの企画運営を担うことになりました。今回の特集では、一作家に関する調査研究、展示、教育普及の各活動を相互に関連づけた実践とその成果の一部について報告します。

WS中の参加者①
ろうそくで図柄を描いた綿布の対角線上に、裏側から伸子（しんし）を張り、筆で染料を擦り込んでいるところ

展示のこと

1950年代に活動した数少ない女性の前衛美術家として紗織の評価は高く、全国の美術館が作品を収蔵するなか、出身地である愛知県内では豊橋市美術博物館が5点、刈谷市美術館が1点、当館が6点を所蔵しています。「プロジェクトや紗織に関心を持った鑑賞者が、首都圏以外でまとまった作品が見られる愛知を訪れたとき、効率的に見て回れるようにできれば」という実行委員会からの提案を受けて上記二館と相談し、6月末から7月中旬までの約3週間、会期が重なるよう調整を行いました。

紗織作品のうち、1950年代に集中的に制作された染色画は、光による退色に注意を要します。当館での展示の核となる代表作《古事記より》（1957年）は、会期を通じて展示する代わりに照度を基準以下に抑えました。それ以外の染色画も近年の常設展や所蔵品によるテーマ展での使用が多かったため半期展示としましたが、会期中はつねに4点を鑑賞できるよう考慮しました（油画1点は通期展示）。

また特集展示とゆるやかに連動する形で、紗織と制作者懇談会の活動を通じて交流のあった河原温、池田龍雄、石井茂雄などによる1950年代の作品を常設展で紹介しました。制作者懇談会には美術以外にも映画や演劇、文学、写真などに携わる人々が関わっており、紗織もその交流のなかで、数は多くありませんが、文学雑誌の表紙や挿絵、映画の評論などを手掛けています。近年当館で収集した写真家・奈良原一高も制作者懇談会の一員でしたが、準備段階では紗織との具体的な接点を見つけるに至らず、今回は作品展示を見送りました。制作者懇談会の活動については調査を続け、別の機会に展示紹介できたらと考えています。

夏休みワークショップ（以下、WS）

紗織の染色画を題材にしたWSができるなら、専門の講師の下、ろうけつ染の工程を正しく知るとともに彼女にとってろうけつ染の魅力とは何だったのかを一緒に考えたい、と以前からアイデアを温めていましたが、悩んだのは講師選びです。技術の習得だけなら染色を生業とする職人に依頼する選択肢もありますが、「私は工芸家ではなくエカキなのです」[*1]と当時の雑誌でくり返し切実に訴えるほど、紗織は染色に魅力を感じながら、画家としての自覚を持って制作していた人です。前衛画家の表現として彼女の作品を柔軟に受けとめられて、かつ染色技法を熟知している人を講師に迎えるのが望ましい、と考えました。

浜松を拠点にろうけつ染を用いた制作活動をしているテキスタイルアーティストの桂川美帆さんは、東京藝術大学および同大学院で工芸技法を幅広く学び、博士号を取得しています。大学進学前には油画も経験していたと知り、今回の企画趣旨を伝えたところ、時代を超えて紗織に共感する要素は多く、ぜひ関わりたいと引き受けてくれました。

染めものと聞くと、藍染や草木染のように布全体を染液に浸す印象がありますが、ろうけつ染では融かしたろうを筆につけ、染めたくない（白く残したい）箇所を覆った後、刷毛や筆で染液を擦るように布にしみ込ませます。染料が完全に乾いたら、生地を蒸熱処理することで染料を定着させ、その後、ろうを取り除きます。染液によっては薬剤を用いるなど工程の違いは多少ありますが、筆を使う文化が浸透しているアジアならではの染色技法であること、ろうは温度が高すぎても低すぎても効果が十分に得られず、防染に適した温度のろうを手早く小まめに扱う必要があることなどを桂川さんから教わりました。筆を運ぶ間にも室温などによって温度が変化することを考えれば、一度に広い面積を塗ることは難しく、高い集中力を要する作業であることがたやすく想像できます。ただ、ろうの垂れた跡や塗りムラなど、作業中にできた偶然の産物による表現の面白さもろうけつ染

芥川（間所）紗織《古事記より》（1957年）の前でのギャラリートークの様子

WS中の参加者②
筆で染料を擦り込んでいるところ

の魅力であるようです。

このように本格的なろうけつ染では危険を伴う工程も多く、創作室のない当館での実践が可能か心配でしたが、桂川さんはこちらの状況を汲みながら、安全を確保しつつ、設備が十分でない場所でも子どもたちがろうけつ染の仕組みを理解できるやり方を編み出してくれました。一方で、伸子（しんし）という道具を使って布を張る体験を織り込み、参加者が伝統的なものづくりの世界の一端に触れられるような工夫もされていました。

WS中には、布を染めた後で乾かす時間を利用して、全員で紗織作品を鑑賞しました。《古事記より》を前に、最初こそ描かれているものを「怪獣だ」「宇宙人だ」と自由に発言するものの、ろうが染液をはじいて白く残ることを体験した直後だからか、観察を続けるうち子どもたちの興味はおのずと作品の制作過程へ移り、さっきまで染めていた布の何十倍もの大きさの作品が布を3枚縫い合わせたもので、継ぎ目に濃淡や色味の違いがあることに気づきます。彼らの「なぜこうなったの？」に対して、紗織は制作専用の広い部屋を持たなかったこと、家族と暮らす自宅で家事と育児をこなしながら限られた時間で制作する必要があったことから、布は図柄が揃うよう下図をある程度整えてから別々に染め、最後に縫い合わせたと考えられることを話しました。続けて桂川さんは「どれだけ厳密に計量して調合しても、毎回同じ色の染液を作るのは絵具の混色とは比べ物にならないほど難し」く、継ぎ目の色味は「確かに違うけれども、ここまで近づけることができるのはすごい技術」なのだと話してくれました。こうした制作者ならではの視点を交えた対話は、身近な絵具と染液とのちがいを理解することにつながりました。

桂川さんには事前打合せなどの来館時に、一部の所蔵作品を実見してもらいました。紗織が色の染分け以外にも複数の表現を巧みに使い分けていることや、断定はできないものの、ろう以外の防染技法（糊など）やサインペン、クレヨンのような描画材を併用した可能性があることが分かりました[*2]。これまで紗織に関する論考は、画題について考察するものやジェンダーの視点から彼女の活動を再検証するものが主でしたが、より作品本体に注目し、染色の奥深さや技法、用いた素材などを丁寧に検証することで、染色画を創造した取り組みへの評価を改めるきっかけになるかもしれないと考えています。

文献調査のこと

上記WSの準備と並行して、ろうけつ染で絵画を制作した理由を画家の言葉から考察するため、新旧問わず文献資料を調べ直しました。1954年の秋、ヨーロッパやロシアで多くの古典絵画を目にした紗織は、自身の油絵具に対する妙な不安は日本と異なるヨーロッパの風土によって育まれてきた油画技法の歴史、伝統の違いに由来するものだと確信し[*3]、同時に自国に対する無知を恥じています[*4]。日本で長く培われ人々の生活や文化に深く馴染んだ「そめもの」を用いて絵画を制作することで、その持ち味を引き出し新たな表現を作りたい、とも語りました[*5]。一方で二人の娘を育て、家事をやり繰りする合間に構想を練り、短期集中で作品を仕上げるには油彩より染色のほうが理にかなっていると考えた可能性もあるでしょう。

他にも調査によって、夫・芥川也寸志が取り組んでいた前衛音楽や、彼の仕事を手助けするなかで紗織が交流した実験工房の芸術家たちの存在[*6]、教えを乞うた染色家・野口道方の活動や当時の手芸に対する人々の関心を示す資料など新たな情報を得ましたが、詳しい検証はこれからです。

今回の記念プロジェクトは一作家の周年事業として非常にユニークな試みであり、館としても改めて多様な視点から画家の活動を再考する貴重な機会となりました。得られた新たな課題に取り組むのはもちろんのこと、本プロジェクトに参加した他館や関係者との情報共有を継続していきたいと思います。（3）

註 |

*1,5　芥川紗織「ささやかな芸術」『芸術新潮』1955年9月号

*2　「染色を楽しむ主婦の集い」（『主婦の友』1957年7月号）での発言から、紗織は糊染とろう染の両方を手掛けていることが分かるが、描画材の使用を含めた個別の作品の技法詳細については今後の調査が必要。

*3　芥川紗織「やさしくできる　ろう染めの作り方」『リビングデザイン』1955年5月号

*4　芥川紗織「創るものの喜び」『婦人之友』1956年6月号

*6　立花隆「武満徹・音楽創造への旅（特別企画　30時間徹底インタビュー　第8回」（『文學界』1993年2月号）に、のちに写真家となった画家・北代省三が紗織からの依頼で横山はるひバレエ団の新作「失楽園」の舞台美術を引き受けた、とある。武満自身も芥川家に出入りし、紗織、也寸志の両方と交流があった。

WS中の参加者③
アイロンをかけて蒸熱処理をした布を水に通し、余分な染料を洗い落とすところ

TALK BACK

三岸好太郎《海と射光》

令和6年度名品コレクションⅡ（2024年6月29日～2024年9月8日）で展示された際に寄せられたコメントを紹介します。ちょうど展示時期が夏の酷暑と重なっていたため、季節感を反映したコメントが目立ちました。

○自然ではなく人工的に造られた美しさ。貝の大きさに一貫性が無くシュール（Ryosuke.K、32歳）

○海は行ってみると「海」そのものにしか目がいかないけど、こうした絵を見ると、海には貝がらもある、いろいろなものがあるじゃないか、という気もちになりました。何でも1つの見方じゃだめだなと思いました。（ソウスケーン、9歳）

○I saw 三岸好太郎's Arts in Hokkaido and nice to meet his art again here !（baren、31歳）

○はじめ見た時は、海の底で海草がゆれていると思ったのですが、よく見たら街並みだったのでびっくりしました。（ぎょうざとちゃわんむし、34歳）

○貝殻が立体的に描かれており、写真のようにきれいな描画だと感じました。今から100年くらい前の絵画をみることができよかったです！（Chim、22歳）

○取ってつけたように並べられた貝がらには モチーフに対する興味も 思想性もさほど無く 図鑑のようにただ並べて描いてみましたという印象を受ける 描かれる砂浜も モノトーンの海も 感情の抑揚が全く無くて それがかえってただただ暑い 日射が伝わって来るような雰囲気で たくさんの貝が描かれていても 静かな作品である（Ume、60歳）

○貝、一つ一つが違っていて、一つの貝ごとにどんな印象を受けるのかと思ってみてみると、真ん中のは夏の開放感という印象が得られました。また、空、海、砂浜の三つの境目がはっきりとしているので、その一つずつが強調されているのではないかと思った。目立たせるものが中心にあり、常識的には貝がらがでかすぎるように思えるかもしれないが、これだけはっきりしていると強く印象づけをすることができるので、目立たせるものを大きくする構図はマネしたいと思った。（キツツキの木、14歳）

○ちょうど半分で区切られているのに半分に見えないバランス不思議　砂もひらべったくないのにひらべったくても砂に見えるフシギ（hina、33歳）

○貝たちが集まって会議を開いているみたい。「どうやったらヤドカリが貝に入ってきてくれるのか」（凪紗、19歳）

三岸好太郎は北海道出身ですが、妻の三岸（吉田）節子が愛知県出身であること、春陽会や独立美術協会の名古屋展の折に頻繁に来名したこと、最終的には名古屋で客死したことなどから、名古屋市美術館では好太郎を郷土ゆかりの重要な画家の1人として位置づけています。（コ）

三岸好太郎《海と射光》1934年、油彩・キャンヴァス

ARTIST

加藤静児　Kato Seiji / 1887-1942

1887（明治20）年、愛知県海西郡十四山村（現弥富市）に生まれる。県立第三中学校から東京美術学校に入学し、当時中央画壇の主流であった黒田清輝ら「新派」の画家たちに師事すると、在学中の1907年、早くも第1回文展に《青丹よし》で入選。これは西洋画の部において、愛知県出身者としては唯一の入選であった。その後も毎年のように入選を果たし、第3回、第6回、第7回には褒状も受けている。その間、1910年にはこれも愛知県出身者として初めて東京美術学校西洋画科を卒業。この時の同級生には藤田嗣治がいた。

1918（大正7）年、太田三郎、川崎小虎らと共に愛知県出身の官展系作家による美術団体「愛知社」を結成すると、翌年から名古屋で展覧会を開催。後に公募制を敷いて郷土の若手育成にも努めた。1920年に渡仏。《加藤静児関係資料》（名古屋市美術館蔵）所収の絵葉書からは、フランス以外にもベルリンやロンドンなど欧州各地を訪れていたことが分かる。1922年に帰国すると、翌年光風会会員となったほか、帝展・新文展でも活躍。帝展では1930（昭和5）年に推薦となり、1936年の新文展（招待展）に出品された《奥日光の秋》は文部省買い上げとなっている。《海》（名古屋市美術館蔵）も1932年の第13回帝展に出品された作品であり、波しぶきの激しさや岸壁の険しさにも関わらず、全体として加藤らしい穏やかな雰囲気に満ちた作品となっている。この年の夏、加藤が知人に宛てた絵葉書（《加藤静児関係資料》所収）では、福井県で帝展出品作に描く場所を見つけたこと、当地で大作を描いていることを伝えており、本作は福井県で見た風景を基に描いたものであると考えられる。

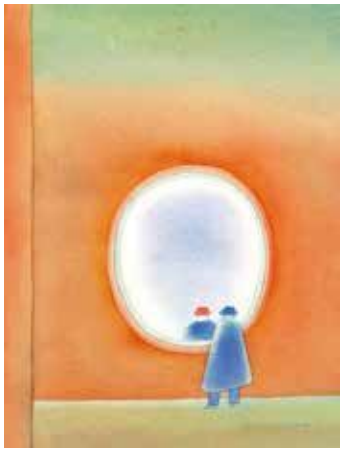
中央画壇で活動する傍ら、1930年に研究書『風景画の新研究』を刊行したほか、東京での展覧会評などを地元の新聞『新愛知』に寄稿するなど、絵画制作以外の活動も行った。1942年、10月の新文展に《秋晴》を出品するも、11月に55歳で逝去。翌年2月には日本橋の三越本店で遺作展が開かれた。(Aoi)

加藤静児《海》1932年　油彩・キャンヴァス　名古屋市美術館蔵

展覧会現在進行形

空想旅行案内人 ジャン＝ミッシェル・フォロン

2025年1月11日（土）－ 3月23日（日）



左：《いつもとちがう（雑誌『ザ・ニューヨーカー』表紙 原画）》1976年
右上：フォロン、ミラノにて 1968年（撮影：コレット・ボルタル）
右下：名刺「フォロン 空想旅行エージェンシー」1990年頃
作品はフォロン財団蔵　©Fondation Folon, ADAGP/Paris, 2024-2025

20世紀後半のベルギーを代表するアーティストの一人、ジャン＝ミッシェル・フォロン（1934-2005）。1月から始まる本展は、彼の初期のドローイングから水彩画、版画、ポスター、立体作品までを含めた約230点を紹介する、日本では30年ぶりの大回顧展です。7-9月に東京ステーションギャラリーで開催されていた展覧会が、名古屋にもやってきます。

ベルギーの巨匠マグリットの壁画に感銘を受け、美術の道に入ることを決意したフォロンは、21歳のころ、フランスに渡ります。そして、作品を投稿したアメリカの『ザ・ニューヨーカー』『タイム』などの有名雑誌に注目されたことをきっかけに、多彩な才能を発揮し、世界中へ羽ばたいていくこととなります。

フォロンの作品の魅力は、なんといっても色彩の美しさ。グラデーションやにじみを巧みに使い、詩情あふれる美しい世界を生み出します。しかし、フォロンの作品は、美しいだけではありません。きれいな世界に惹かれてよく見てみると、そこには、環境破壊や人権など、現実に対する厳しく強いメッセージが潜んでいるのです。

ところで、本展のタイトル「空想旅行案内人」という言葉、気になった方もいらっしゃるのではないでしょうか?これは、フォロンが実際に使用していた1枚の名刺から来ています。そこには、「AGENCE DE VOYAGES IMAGINAIRES（空想旅行エージェンシー）」と記されています。「入っておいで、気兼ねせずに」と語りかけるような絵を目指していたというフォロン自ら空想の旅への案内人という肩書を名乗っていたのです。

本展も、空想旅行をするような気分で作品をめぐっていただける構成となっています。フォロンが残した、やさしく、そして厳しいメッセージを探しに、空想の旅に出かけてみませんか?フォロンの作品にたびたび登場する、帽子にコート姿の「リトル・ハット・マン」と、会場でお待ちしております!（mm）

アンケートより

吉本作次　絵画の道行き

2024年4月6日（土）－6月9日（日）

今年度最初の特別展として、地元・名古屋で制作と発表を続けてきた画家吉本作次(1959年、岐阜県生まれ)の本格的な個展を開催しました。吉本氏がその鮮烈なデヴューを飾った時期、名古屋市美術館は未だ開館すらして居らず、「絵画の復権」を果たしたその作品については、敬意と羨望の眼差しで眺めて居ました。

ただ、しばらくすると、ほとんどの作品が個人所蔵となり、永らくその所在が分からなくなっていました。今回の企画では、その「“失われた80年代”をもう一度見てみたい」という全くの個人的な希望から始まったものです。そして、今回の展覧会のためにギャラリーの方々には多大なご協力をいただき、これまで見たことのない作品にまで出会えました。展示作業の初日、搬入された作品の梱包を解き、展示位置に並べた時、およそ35年前の記憶が甦るとともに、展示室で一人、思わず「勝ったな！」とつぶやいたほどです。今回ご鑑賞いただいた方々のなかにも、私と同様の体験をされた方々ももいらした様です。

○「吉本さんの作品は今まで数点しか見たことがなかったので、この展覧会でたくさんの作品を見ることができ、またその変遷もわかる内容だったので、とても良かったです。80年代の作品はダイナミックでアグレッシヴだけど、見る方も力が入り、1990年代以降とくに2000年以後は作風が変わって穏やかな気持ちで見れました。」（40歳代）

○「作家の前半期の抽象表現から現在の様式までの変遷が分かり、とても良かったです。絵画に対する純度の高い制作態度にとても感銘を受けました。」（40歳代）

○「正直、吉本作次氏についてはよく知らずに来ましたが（観ていて、観たことのある絵が何枚かありました）、作家の創作への向き合い方や作品の変容が時間軸で分かりやすい展示であり、作家の内面的成長を観る者が共鳴できる作品展だった。まさにタイトルの「吉本作次　絵画の道行き」だったと思う。」（60歳代・女性）

○「ポスターに魅力を感じて来場しました。なんとも表現しがたい雰囲気に心が癒されました。地下の作品（習作等）を拝見して、やっぱり心の内の豊かさを知りました。」（70歳代）

画家の指導者としての一面を伝えてくれる感想もいただきました。

○「吉本作次氏を名古屋芸大の社会人入学で学んでいた（私が58～62歳の）時直接教えていただいたのですが、訳の分からないことをピシピシと言う、年上の私にはとても生意気な方だと思っていたのですが、「絵画論」を受けた時、とても面白く印象的で、私が今描く絵にも影響をいただきました。先生がこんなに実績のある方とは本当に知りませんでした。考えてみたら、本物の画家なので常に前を見て、私のようなシニアの美術学生にも、若者と同じく厳しく対応して下さったのだと分かりました。」（70歳代・女性）

私も（吉本氏が）こんなに話が上手い画家とは本当に知りませんでした。展覧会の打ち合わせのため、アトリエやご自宅で吉本氏と面会している時に、古今東西の先人たちの絵画作品に対する氏の愛情や理解の深さ、さらには視点の面白みについて、幾度となく気づかされました。

インスタレーション全盛の時代にあって、決してブレなかった氏の信念と制作態度、そして展覧会タイトルにもなった「絵画の道行き」を辿るようなお話については、展覧会会期中に記念講演会としてお話いただきましたが、当日は多くの皆様に聴講いただきました。それにしても、大学で制作指導を受け、なおかつ「絵画論」の連続講義を受けられたとは、羨ましい限りです。（J.T.）

展覧会「吉本作次 絵画の道行き」常設展示室3 展示風景

お詫び

前号（126号）の特集「戦前の鶴舞公園美術館をめぐって」において、作家名に誤りがございました。
謹んでお詫び申し上げますとともに、右記の通り訂正させていただきます。

誤　市野長之助　　正　市野長之介

REVIEW

北川民次と久保貞次郎
―真岡市コレクションを中心に―

2024年8月3日（土）－9月29日（日）
瀬戸市美術館

本年は北川民次の生誕130年にあたります。当館ではこれを機に「北川民次展　メキシコから日本へ」を開催しましたが、彼にゆかりのある瀬戸市でも、重要な展覧会が開催されました。久保貞次郎（1909–1996）は美術批評家としてよく知られており、北川民次を含め、数多くの芸術家を支援しました。その旧蔵資料は現在、彼の暮らした栃木県真岡市に収蔵されており、本展はそのコレクションを中心に、北川と久保のつながりに焦点を当てたものです。

本展からは、二人が親密な関係を結び、家族ぐるみで交流していた様子が窺えます。北川は真岡をしばしば訪れ、広々とした田園風景や久保の娘たちを、活き活きとした筆致で描きました。また二人は協働して絵本を出版しましたが、その原画も久保の手を経て、現在真岡市が所蔵しています。大切に保管された原画の数々は、北川の制作過程を教えてくれるとともに、二人の深い信頼関係を物語っているようです。

瀬戸は北川が最も長く暮らし、数々の作品に描いた土地です。市内では没後も顕彰活動が続けられ、アトリエが保存・不定期公開されてきたほか、瀬戸市美術館ではおよそ五年に一度の頻度で個展が開催されています。本展でも、アトリエが展示室内に一部移転・再現されたほか、メキシコから持ち帰った工芸品やアルバムなどが展示され、作家をより身近に感じることができました。

ところで、当館所蔵の《作文を書く少女（慰問文を書く少女）》をご覧になった方は、モデルとなった長女・多美子の小学生の姿が印象に残っているのではないでしょうか。本展出品作の《タミ子像》では、彼女はすっかり大人の姿と表情になっており、その成長に立ち会えたような気分になりました。本作は、瀬戸のアトリエを舞台に画家の義娘と孫を描いた《アトリエの中の母子》とあわせて近年新たに瀬戸市美術館に収蔵され、親しい人々に惜しみない愛情を注いだ、人間味あふれる芸術家の姿を再発見させてくれます。（KK）

北川民次《タミ子像》1954年　油彩・キャンバス　瀬戸市美術館蔵

舟越桂　森へ行く日

2024年7月26日（金）－11月4日（月・祝）
彫刻の森美術館 本館ギャラリー

「舟越桂　森へ行く日」は、彫刻の森美術館の開館55周年を記念して計画された展覧会です。舟越氏は今年3月に逝去されましたが、本展は生前から企画されており、作家の軌跡とともに開催を望んだ作家の意思が伝わってくる展覧会でした。

まず目を引かれたのは、ポスターやチラシに使われている写真です〔写真〕。《樹の水の音》が、緑豊かな自然のなかに立っています。半身像は凛として佇み、その瞳は悠遠くを見つめています。同美術館の学芸員の解説によると、新作《私は街を飛ぶ》の第2版を屋外展示場の一角の池のほとりに展示することを、作家と決めていたといいます。病のため新作は叶いませんでしたが、遺族や所有者の熱意から、旧作《樹の水の音》を池のほとりに置き、撮影されました。この経緯を知り、本展にあたり舟越氏が描いた情景を見ることができたように思え、この写真がメインビジュアルとして選ばれた意義の深さを感じました。

展覧会の冒頭には、作家のアトリエが再現されていました。作品が生み出されてきた空間は、制作のための道具のほか、スケッチ、写真をはじめ、様々な言葉がつづられた自筆のメモが壁に貼り付けられていました。初期の《聖母子像のための試作》（1979年頃）も置かれていました。観る者に静思の時間を与えてくれる沈黙の半身像は、放たれた作家の思索のかたちであることをあらためて確認したように思います。会場の一室には、2023年からの入院中のスケッチ（手帳）が展示され、順番に描かれたものを説明する作家の様子が映像で流れていました。空の雲に顔を見出したり、街を描いたり、創作の種がそこには残されていました。60点ほどの彫刻とドローイング・版画、映像を通して、作家の創作の軌跡を見直させてくれる展覧会でした。

舟越氏の手で新たな像は生み出されません。しかし、舟越氏が残した像を前に、私は何に耳を傾け、何を求められ、何をすべきなのか、そして計り知れない姿、表情を見せていく人間という存在について考えさせられ続けていくのだと感じています。（I.）

《樹の水の音》2019年
西村画廊蔵、写真：今井智己
画像提供：彫刻の森美術館（公益財団法人彫刻の森芸術文化財団）

BOOK

『新版 名作椅子の由来図典』

西川栄明 著
坂口和歌子 イラスト
誠文堂新光社
2021年

近年、生活空間のデザインを取り上げた展覧会が数多く開催されています。建築や家具、家電、日用品のデザインが注目を集めるのは、コロナ禍以降、自宅で過ごす時間をより快適にしたいと考える人が増えたからかもしれません。なかでも毎日腰掛ける椅子は、身体のリラックスと密接に関わるツールであると同時に、室内の印象を左右する大きな家具であり、そのデザインは重要です。本書は、世界各地で生まれた椅子のデザイン史を系統的にわかりやすくまとめて紹介しています。デザイン史を扱った書籍は多くありますが、家具や工芸など様々なジャンルが混在して語られることが多く、椅子に特化した解説本はめずらしいと言えます。

名古屋市美術館には、建築家・黒川紀章が選んだデザイナーズ・チェアが置かれているのをご存じでしょうか。地下ロビーにある黒い革張りの「バルセロナチェア」は、ドイツの建築家ミース・ファン・デル・ローエのデザイン。X字型のスチール製の脚が優美です。同じく地下ロビーに並ぶマルセル・ブロイヤーの「ワシリーチェア」も、バルセロナチェアと同じく黒い革とスチールパイプによるシンプルなデザインです。ファン・デル・ローエとブロイヤーはともにバウハウスで教鞭をとっており、シンプルな機能美を追求した二人のデザインは、空間に調和を生んでいます。

1階ロビーには、黒川紀章がデザインした「EDO」が置かれています。厚いクッションを組み合わせ、立方体に近いどっしりとした安定感あるデザインで、ル・コルビュジェの「グランコンフォール（LC2）」の流れを汲んでいるように見えます。

常設展示室と地下ロビーには、スイス生まれのマリオ・ボッタによる「セコンダ」があります。フレームと座面はスチール加工で、背もたれには発砲ポリウレタン製のロールが使われています。直線と曲線のバランスが心地よく、軽量で持ち運びやすい点も魅力です。

黒川紀章は、近現代の名匠が生んだ椅子を厳選し、館内各所に配しています。曲線や色彩が印象的な遊び心のある建築空間だからこそ、シンプルで機能的な椅子がアクセントになっています。ご来館の際は、デザイナーズ・チェアにもぜひ注目してみてくださいね。(haru)